様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２９６２

研究課題名（和文）戦後日本社会における和服の歴史社会学的研究

研究課題名（英文）Historical sociology of kimono in post-war Japanese society.

研究代表者
小形　道正（Ogata, Michimasa）

大妻女子大学・家政学部・専任講師

研究者番号：９０７７８１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では戦後日本社会における着物が①「生活着としての着物」（終戦後から1950年代）、②「盛／正装としての着物」（1960年代から1970年代前半）、③「芸術作品としての着物」（1970年代後半から1980年代）、④「コスプレとしての着物」（1990年代から現在）という4つの形象に区分しうることを記した。また、そのなかで人間と衣服の理論的な関係性が①では「作る衣服」、②と③では「買う衣服」、④では「借りる衣服」であることを明らかにしつつ、さらにそれぞれから「贈与」、「所有」、そして「変身」という概念が析出しうることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
かつて和服はわれわれの生活着であったが、戦後日本社会の洋装化のなかでその姿は失われていった。だが、人びとは現在も非日常的な衣装として、成人式や卒業式などの冠婚葬祭や様々なイベントのなかで袖を通している。この洋装化の背面に生じた和服の日常着から非日常着への変容は、具体的な自国文化の理解という歴史的かつ現在的な問題としてだけではなく、衣服の製作、購入そしてレンタルといった人間と衣服の理論的な関係性の変貌を明らかにするとともに、そのなかに贈与、所有、変身といった衣服をめぐる人間の欲望を析出したという点において学術的ならびに社会的意義を有する研究である。

研究成果の概要（英文）：This study has shown that kimono in post-war Japanese society can be divided into four categories: (1) 'kimono as everyday wear' (post-war to 1950s), (2) 'kimono as formal wear' (1960s to early 1970s), (3) 'kimono as a work of art' (late 1970s to 1980s) and (4) 'kimono as costume play' (1990s to present).
It also clarified that the theoretical relationship between human beings and clothing is 'clothes to be made' in (1), 'clothes to be bought' in (2) and (3), and 'clothes to be rented' in (4), and showed that the concepts of 'gift', 'collection' and 'transformation' can be precipitated from each of these.

研究分野：社会学

キーワード：着物　和服　社会学　戦後日本　ファッション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

これまで申請者は（α）ファッションならびに文化の理論的分析、（β）日本社会における洋装化の実証的分析、（γ）日本社会における和服の実証的分析、という一連の研究活動を行ってきた。本研究では主に 3 つ目の研究課題（γ）について、とくに戦後日本に焦点をあて、その深化を目指すものである。

まず本研究の学術的背景として、日本の衣服ならびにファッションに関する研究では、なにより服飾史の領域が挙げられる。たとえば、石川綾子 1968『日本女子洋装の源流と現代への展開』家政教育社や中山千代 1987『日本婦人洋装史』吉川弘文館などの研究はその代表例である。だが、これら服飾史的研究は歴史記述に際しての理論が、衣服の合理化や女性の解放という単線的な枠組みに終始しているという大きな問題点を抱えていた。一方、社会学の領域においては古典的な著作として Simmel, G. 1911, Philosophische Kultur: gesammelte Essais, Leipzig: Alfred Kröner Verlag. や Baudrillard, J. 1972, Pour une critique de l'économie politique du signe, Paris: Éditions Gallimard. などが挙げられるが、それらの多くは流行現象のメカニズムの解明に焦点があてられており、衣服に関わる産業的展開や人々と衣服の関係をめぐる生活実態の変化という、衣服の歴史性については看過されていた。

そこで申請者はまず（α）と（β）の研究に取り組むこととした。（α）については鷲田清一をはじめとする現象学的ファッション論なども含め、従来のファッション研究が〈衣服と消費〉、〈衣服と身体〉、そして〈衣服とメディア〉という 3 つの方法論に析出しうることを明らかにしたうえで、今後の研究は衣服そのものを対象とする必要性を論じた。一方、（β）については「ファッション・デザイナー」と呼びうる作り手に焦点をあて、主体と環境の双方より析出される彼らの社会的役割の変容を通じて、日本社会における洋装化の過程を解明した。そこでは現在に至る「ファッション・デザイナー」たちが、洋裁の教育機関の開設とスタイルブックの創刊による〈教育者としてのデザイナー〉から、自らのデザインを創造しながら一つの芸術作品として語る〈芸術家としてのデザイナー〉へ、そして買収や売却を繰り返しグループ化するファッション・ブランドのなかで一企業に所属する〈企業組織人としてのデザイナー〉へと変貌を遂げてきたことを明らかにした。

しかし、これら諸研究を遂行するなかで、申請者は新たに（γ）の研究に取り組むに至った。それは以下の 2 つの学術的問いによる。ひとつは具体的な水準であり、（β）の研究において解明した洋装化の背面として、和服は終戦後も生活着であり続けたが、高度経済成長期における既成服の普及のなかで、我々の日常風景から消え去っていった。だが一方で、我々は決して和服を纏わなくなってしまったのではなく、成人式や卒業式をはじめとする冠婚葬祭時の、非日常的な衣装として着用し続けている。そして、現在の和服はもはやイベント時における、コスチューム・プレイのように扱われている。ひとつめの問いとは、このような異国文化の普及過程の裏側で、自国文化の変容を和服という具体的対象を通じて明らかにすることである。もうひとつは（β）の研究では、一般的な着用者の意識や実践を充分に析出し得なかったことによる。（α）にて記したように、重要な問題は衣服そのものを対象とすることであり、人間と衣服の関係を明らかにすることであった。こうしたなかで戦後日本における和服は、人々が作るものから、買うものへ、そして借りるものへと大きな変貌を遂げてきた。すなわち、和服はたんにひとつの文化事象としてだけではなく、我々と衣服の関わり方という根源を映し出す重要な研究対象なのである。したがって、申請者は洋装化の背面としての和服の変容という具体的な問いと、人間と衣服の関係という理論的な問いの双方より本研究課題を設定した。

２．研究の目的

本研究の目的は、以上の問いより、戦後日本社会における洋装化ないし近代化の裏側で和服が辿った社会過程の動態を析出し、我々自身の自国文化ないし伝統文化への眼差しについて明らかにするとともに、終戦後から現在に至る和服の軌跡を通じて、人間と衣服の関係について探究するものである。すなわち、それは洋服が一般化していくなかで、和服にいかなる視線が向けられたのか、またその変容を可能にする背景ないし論理とは何かについて解明することである。そして、この戦後日本社会における和服の変容が、大きく我々と衣服の関わりにとっていかなる意味を有するのかを思考するものである。

このように、本研究は従来の社会学や服飾史では充分に論じられてこなかった、戦後日本社会における和服という文化事象を対象としている。だが、本研究はたんに研究対象の独自性にのみ還元されるものではなく、我々の自国文化への理解を明らかにするだけに留まるものではない。また、次項に記すように、それは産業側と着用者側の双方の視点より和服の変容を析出するという、本研究の明確な方法論によるものだけでもない。より重要なことは、本研究が和服という具体的対象を通じて、人間と衣服の歴史的かつ現在的な関係という、より本質的な問題について問うていることである。衣服との関わりにおける歴史的な変化は、我々人間にいかなる意味を及ぼすのか。したがって、本研究遂行による成果は社会学や服飾史、あるいは文化史の領域のみならず、より普遍的にこれまで衣服を着ることの意味について問題にしてきた、哲学や文化人類学などの他分野にも広く影響を及ぼすものであり、本研究は学際的な意義を有するものであるとと

もに、今後諸分野とのさらなる協働を可能にする土台を形成することに資する研究であると考える。

３．研究の方法

本研究ではこれまでの研究成果を踏まえつつ、それぞれの和服の形象について解明し、戦後日本社会における和服の歴史社会学的研究の全体像を描き出す。そのなかで和服は戦後日本においていかなる繊維政策と関連し、また具体的にどのような商品が生産されたのか。一方、我々は和服に対して、いかなる語りを紡ぎ出し、どのようなイメージを付与していったのか。すなわち、本研究は和服に纏わる繊維産業や和装業界をはじめとする産業側の展開と、我々一般の着用者側の和服に対する意識や実践という 2 つの視点に準拠する。この方法を通じて、各時代の和服の形象がいかなる我々の眼差しの対象であったかを明らかにするとともに、この全体像を通じて歴史的かつ現在的な人間と衣服の関係性を問う。

本研究が扱う資料体としては、以上の方法に基づき、通商産業大臣官房調査統計部が刊行する『繊維統計年報』や『商業統計』などの統計調査とともに、『朝日新聞』や『読売新聞』の記事内容、そして 1953 年に創刊された『美しいキモノ』をはじめ、『主婦之友』や『婦人倶楽部』などの当時「4 大婦人雑誌」と呼ばれていた婦人雑誌内にみられる誌面構成や投稿記事を渉猟し、それら資料を読み解いていく。

４．研究成果

コロナ禍という未曾有の事態をはさみながらも、交付期間中 7 つの拙稿を発表することができた。具体的には、戦後日本社会における和服が①「生活着としての和服」（終戦後から 1950 年代）、②「盛／正装としての和服」（1960 年代から 1970 年代前半）、③「芸術作品としての和服」（1970 年代後半から 1980 年代）、④「コスプレとしての和服」（1990 年代から現在）という 4 つの形象に区分しうることを示した。また、そのなかで人間と衣服の関係性が①では「作る／られる衣服」、②と③では「買う／われる衣服」、④では「借りる衣服」であること、さらにそれぞれから贈与、所有、そして変身という概念が析出しうることを明らかにしてきた。

期間中は主に①から③について、具体的に調査ないし執筆を進め、研究論文として発表することができた。だが、残された課題も多い。なかでも、上記④にあたる 1990 年代以降の「コスプレとしての和服」ならびに「借りる衣服」、変身の概念についてひとつの論文としてまとめる必要がある。また、期間中には「衣服と人間の関係史――つくること、買うこと、借りること」を上梓することができたが、本研究課題の序章となりうるような人間と衣服の関係をめぐる理論についても再度考えてみなければならないだろう。④の具体的な事象について研究するとともに、理論的な視点について再考を進めていくことで、本研究課題の全体像を提示したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小形道正	４．巻 14
２．論文標題 非日常化する着物と衣服を買うこと――1960年代から1980年代（下）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Fashion Talks...	６．最初と最後の頁 48-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Michimasa Ogata	４．巻 5
２．論文標題 What Is the Newness of the New Kimono?: Postwar Japan in the 1940s and 1950s	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Created and Contested: Norms, Traditions, and Values in Contemporary Asian Fashion (MEIS-NIHU Series)	６．最初と最後の頁 157-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小形道正	４．巻 416
２．論文標題 衣服と人間の関係史――つくること、買うこと、借りること	５．発行年 2022年
３．雑誌名 広告	６．最初と最後の頁 151-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小形道正	４．巻 13
２．論文標題 非日常化する着物と衣服を買うこと――1960年代から1980年代（上）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Fashion Talks…	６．最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小形道正	4．巻 95
2．論文標題 衣服をめぐる人間との関係――現代社会における和服の変容より	5．発行年 2020年
3．雑誌名 装いと規範3――「伝統」と「ナショナル」を問い直す	6．最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Michimasa Ogata	4．巻 34(1)
2．論文標題 The Transformation of the Kimono and Postwar Japanese Society: A Theory Concerning the Relationship between Humans and Clothes	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Society and Theory	6．最初と最後の頁 111-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小形 道正	4．巻 91
2．論文標題 借りモノとしての衣服	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アステイオン	6．最初と最後の頁 103-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小形道正	4．巻 8
2．論文標題 生活着の着物と衣服を作ること――終戦から1950年代（下）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Fashion Talks...	6．最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小形道正	4．巻 1192
2．論文標題 贈与・所有・変身――衣服をめぐる欲望の相乗性と相剋性から	5．発行年 2023年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 101-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 小形道正
2．発表標題 戦後日本社会における着物の変容ーー人間と衣服の関係性の行方
3．学会等名 ドレス・コード？――着る人たちのゲーム」展シンポジウム
4．発表年 2019年

1．発表者名 小形道正
2．発表標題 衣服をめぐる人間との関係―現代社会における和服の変容より
3．学会等名 京都大学東南アジア地域研究研究所ワークショップ「装いと規範」（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Michimasa Ogata
2．発表標題 Kimono and Japanese society from after World War II to the present: Theory of the relationship between humans and clothes
3．学会等名 Korean Society for Social Theory and The Society for Sociological Theory in Japan Joint Session（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 小形道正
２．発表標題 贈与・収集・使用――現代日本の着物文化
３．学会等名 「見田宗介／真木悠介を継承する」シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 小形道正
２．発表標題 100年分の服――人間との関わりをみつめて
３．学会等名 東京ビエンナーレ2023（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 小形道正
２．発表標題 戦後日本社会の着物文化――作る、買う、借りる
３．学会等名 日本家政学会被服心理学部会（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

事業報告等 https://www.kci.or.jp/profile/#content-report 事業報告等 https://www.kci.or.jp/profile/#content-report

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関